

# 「指標を活用した観光地づくり」に思うこと

公益財団法人日本交通公社 観光調査部長 寺崎 竜雄

本特集でお伝えしたかったことは、観光地がいつまでも元気であるためには定期的な健康診断が大切だということ。一般的な事業活動におけるPDCAサイクル（Plan（計画）↓Do（実行）↓Check（評価）↓Act（改善））を観光地の管理・運営に持ち込みましょう、そのなかでもCheck（評価）が肝になりますよ、と言い換えられるかもしれません。

さて、私たちが受診する健康診断では、あらかじめ検査項目が決まっており、項目ごとに正常範囲も定まっています。そして、正常値を超える項目があれば、疑わしい病気が指摘されます。この検査項目が、今号の特集のキーワードである「指標」や「持続可能性指標」という言葉に相当します。しかしながら観光地の健康診断では、いまだ検査項目、そして項目ごとの正常範囲が明らかになっていません。いま、こ

の一連の観光地の健康診断手法を開発し、定着させていこうという動きが活発になってきているのです。これまでの動きを振り返ってみましょう。

## 指標活用の芽生え

熊谷氏によると、米国の自然公園（国立公園など）のような自然の豊かな地域の資源や利用環境を守るといふ問題意識から、LACという指標を活用した自然地域の管理・運営概念が一九七二年に生まれました。その後、利用者ニーズや利用の多様性に応じたレクリエーションの質を確保するために、資源の原生度を基にして利用エリアをゾーニングし、ゾーンごとに理想的な利用体験と資源の状態を確保しようとする考え方（Recreation Opportunity Spectrum: ROS）を取り込んだ、より実践的なLACが一九八五年に開発されます。その考えをベースにした適用例の一つがオーストラリアのカンガルー島のKIITOMM（特集1コラム）です。米国の美しい、実

用性を重視した観光地の計画と管理・運営手法だと思えます。

## 観光分野における持続可能な概念とUNWTOの取り組み

二神氏のレビューでは、一九九二年のリオデジャネイロでの第一回地球サミットがきっかけとなり、世界規模で進行する環境破壊に向き合うために、観光分野にも持続可能という考え方が持ち込まれます。ヨーロッパに本部を置く世界観光機関（以下、UNWTO）は、STI（持続可能な観光のための指標）の重要性を提唱し、五十人以上の専門家が十年余かけて議論し、試行します。その成果として二〇〇四年に発行したのが『観光地のための持続可能な開発指標』です。このガイドブックにカンガルー島のKIITOMMが紹介されていることから、米国民生まれのLACの考え方もUNWTOに生かされているといえます。ガイドブックは、指標を活用した観光地の健康診断と問題点の発見、

そして治療というサイクルの重要性を説明していますが、どちらかという指標の開発という点に注力しています。また、どのような観光地にも適用可能な汎用性の高い理論的モデルという点も特徴です。

## UNWTO指標 理論からの発展

ところで、UNWTOのガイドブックが万能で、ここに研究成果が収束したように思ったのですが、ミラー氏は「観光の評価システムは多数存在し広く定着した特定のシステムはない」と語っており、まだまだ実践で活用するには研究の余地があるようです。ミラー氏との最近のEメールのやりとりのなかに、「欧州委員会においてヨーロッパにおける持続可能性指標をそろそろ決定する予定」とあることから、この先さらに何らかの理論的枠組みを提示しようという動きもあるようです。このいきさつや、今後の動きは、改めて確認することにしませう。

## わが国での 指標活用に向けて

いくら理論的モデルを構築しても、ミラー氏が言うように、観光地の多様性と複雑さを考えれば、観光地の持続可能性を把握するためのモデルは観光地の数だけできるかもしれません。ここで観光地の健康診断が、有効が必要であるという前提に立ち、これをわが国でも活用する際に、留意すべき点をいくつか考えてみましょう。

### 〈目標達成型〉

現在の状態の観測だけでは、その数値が健康だといっているのか、どこかに疾患があるのかは判断できません。この判断は、あらかじめ理想像が示されていて初めてできることです。病気でなければよいのかもしれないし、とても高い身体能力を身につけたいと考えるかもしれない。自分たちで、どのような観光の状態であるべきなのかを明らかにし、そこへの達成度を指標で測るといふ、目標達成型の枠組みが重要です。

### 〈適合範囲〉

指標で測られる数値のレベルは、高ければ高いほどよい、逆に低ければよいと考えることは、高い理想を持つという点ではよいのかもしれませんが。しかし、持続的にということに気をかけるなら、ほどほどという目線も大切でしょう。LACの優れた点は指標の判定結果を適合範囲(Acceptable Range)として、許容可能な幅で捉えている点です。カングルー島でインタビューした際に「できすぎはよくないと考えている」と聞きました。また、適合範囲はその時に応じて変更する、とも言っていました。まずは、少し高い目標を立ててみるのがよいと思います。

### 〈背景を「よみとく」〉

よく数値が一人歩きをするといえます。ここでも大切なことは数値そのものではなく、なぜこのような結果になったのか、現状に至る背景を「よみとく」ことです。客観的、科学的ということに加えて、渋谷氏が語っているように(P30のコラム参照)肌感覚という面も重要になります。

### 〈コミュニティ主体〉

二神氏は、UNWTOガイドブック的な手法は一見するとトップダウン式に見られがちだが、実のところは地元関係者の参加型のプロセスも明記していると見解しています。何よりもその観光地で直接的に利害を受ける関係者が主役となることが重要で、外部の関係者や研究者などはサポート役に徹するべきです。また、指標を測るモニタリングなどの作業は、地域のコミュニティの協力なしには継続することはできません。カングルー島のケースでも、指標決定過程におけるコミュニティ重視が確認されています。

### 〈継続のために〉

いかによい指標(中島・清水稿でUNWTOによる指標絞り込みの視点が記載)を開発したとしても、それを継続して測定しなければ役に立ちません。この一連の作業の実践には、有能な事務局と、資金が必要で、事務局に専属のプロジェクトマネージャーがおり、委員会との連携や

# 視座

## 特集テーマからの

調整を行っています。また、一連の作業経費は、委員会の構成団体のうちコミニティを除いた七組織が拠出する資金で賄われています。金額は合計で十一万豪ドル（約一千万円）。このなかにはアンケート調査料やマネージャーの人件費等が含まれます。調査内容の充実、スタッフの拡充のためにも、資金は充実させたいところですが、現存の資金で現実的にできることを着実に続けている点は、見習うべきでしょう。

### 心安らかな暮らしを 持続する

KI-TOMMのもう一つの優れたところは、コミニティの暮らしぶりや住民意識に関する指標が重要視されている点だと考えます。住民が観光に関わる意思決定に関与できているか否かにまでも気にかけていることを知り、大きな衝撃を受けました。住民意識のモニタリングはU

NWTOのガイドブックにも生かされています。

わたしは、指標活用において最も大切なことは、「地域住民のこころ」の観察だと感じています。わが国では、既存の観光地といわれるような場所以外でも観光を地域活性化の起爆剤と位置づけて誘客に取り組み始めた地域が増えています。また、観光客のニーズと行動の多様化によって、地域の生活文化や暮らしぶりにじかに触れようと、住民の生活空間にまで観光客が入り込むようになりました。とある離島のスーパーの入り口に貼られていた「ここは人が暮らすところです。水着でまちなかを歩かないでください」というメッセージにハッとすることがあります。信仰の対象として古くから大切に扱っていたところに観光客が踏み入ったり、挙げ句の果てには住民に対して心ない言葉を投げかけたり、というようなことも起きていたと聞いたことがあります。観光地としての進展によって、暮らしの安心感が損なわれることはあつてはなりません。渋谷氏が村民との意見交換会で

### コラム「観光地の声」 小笠原の指標化で感じたこと



小笠原村産業観光課長 渋谷 正昭

先日、村民との意見交換会を開催して“世界自然遺産の登録の前と後で何が変わったのか”について話し合いました。そこでは、「来島観光者数」「観光消費額」「観光客の満足度」に加えて、村民が気にかけていそうな「人口」「水の使用量」「ゴミの処理量」などの変化についてもデータを用いて説明しました。また、環境省からは外来種対策の成果として「アカガシラカラスバトの目視数」の増加が伝えられ、資源保全面での効果も示されました。

数値（指標）を用いることにより遺産登録前後の変化を具体的に説明しやすかったですし、何よりも村民と前向きな対話ができたと感じています。

ここで重要なのは、“数値はあくまでも平均値にすぎず多様化が進んでいることにも気づくこと”“数値変化の背景にある要因を読み解くこと”、そして変化を知ることがゴールではなく“その変化を村民がどのように受けとめているのかを知ること”だと思います。村民の声も数値（指標）で表現できるとよいですね。ただし、数値で示すことのできない肌感覚もとても大切だと考えています。

（談）  
（しぶや まさあき）

果たしたかったのは、島らしい暮らしが損なわれていないだろうか。を知ることであったのだと思います。経済発展と資源保護のどちらを優先するのですかという問いを受けることがあります。どうしても一つに絞って答えよと言われると、わ

たしは最も大切なのは「暮らしの安心感」や「ふるさと性の確保」だと言うようにしています。持続的な観光地づくりは、何よりも、そこに暮らす人のために行うものだと考えているからです。

（てらさき たつお）